

# この子らと

令和5年3月号

## 命輝く子ども



わくわく鹿児島中央認定こども園



園長 川口公男

### 春は、別れと出会いの季節

行く河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。よどみに浮かぶうたかた(泡)は、かつ消えかつ結びて久しくとどまりたるためしなし。世の中にある人のすみかもまたかくのごとし。(鴨長明『方丈記』より)

本年度もまた、「別れ」と「出会い」の季節がやってまいりました。

本園のリーダーとしてお手本を示してくれたり、おにいさん、おねえさんとして小さい組のお世話をしてくれたりした心優しいぞう組22名の子どもたちが卒園します。

一人一人がとても、愛すべき子どもたちでした。

無数の可能性をもっている子どもたちです。

たった一つの命、一度きりの人生を大事に生きていてほしいと願っています。



また、本園に対して、多大なご尽力をいただいた保護者のみなさまにも子どもたちとともに卒園される方もおられます。

卒園までの残りの日々を子どもたちとともに楽しく、愉快に過ごしていきたいと思えます。

### 巣立ち行く君への言葉

「後ろを振り向く必要はない。あなたの前には、いくらでも道があるのだから。」(魯迅)

「人みな美しき種子あり、明日、何が咲くか。」(安積)

### ヤマアラシのジレンマ

哲学者ショーペンハウエルの寓話です。「ある冬の日、ヤマアラシのカップルが寒さに凍えておりました。お互いの体を寄せ合って暖をとろうとしたところ、接近し過ぎて自分たちの針で相手の体を突き刺してしまいます。しかし、離れすぎると今度は、寒さに耐えられなくなってしまい、また、体を寄せ合

い、お互いを針で突き刺してします。

こんなことを繰り返しているうちに、このカップルは、お互いにそれほど傷つけ合わないで済み、しかも、お互いに暖め合える「つかず離れず」の距離を見つけることができた。」というお話です。

子ども同士が仲良くなるためには、「近づくこと」が必要となります。しかし、近づきすぎるとお互いの考え方や思いの違いから、争いが起きて離れていきます。いわゆる「ケンカ」です。



「●●ちゃんがいじわるをした。」などと訴えてきます。しばらく、離れていましたが、やがて、寂しくなったのか、また、近づいていき、そしていつの間にか、離れてきた子どもと楽しそうに遊んでいます。

子どもたちの世界も、お互いに傷つけ合ったり、なかよく遊んだりを繰り返しながら、程よい、距離感を見つけながら園生活を楽しんでいくことと思えます。

一期一会の出会いに感謝いたします。

日本の人口は、1億2千500万人、地球上の人口は、約80億人、そして一生の中でなんらかの接点をもつのは、約3万人と言われています。

学校等で近い関係になるのが「3000人」、親しい会話ができるのは、「300人」、友達と呼べるのが「30人」、親友と呼べるのが「3人」と言われています。

そう考えますと本園での子どもたちや保護者のみなさまとの出会いは、運命の出会い、不思議なめぐり合わせと感じています。

子どもたち、保護者の皆さまとの一期一会の出会いに感謝いたしますとともに、これまでの本園に対するご厚情に心から感謝申し上げます。(職員一同)



(雨天時のお別れ遠見)